

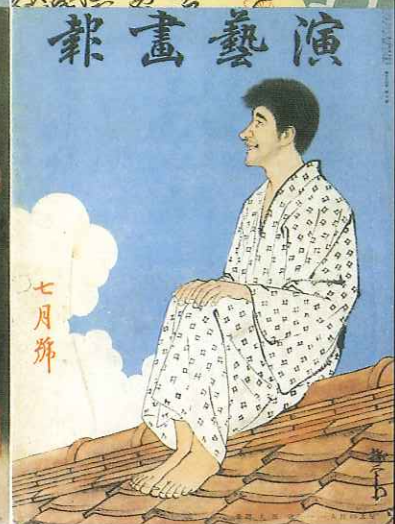
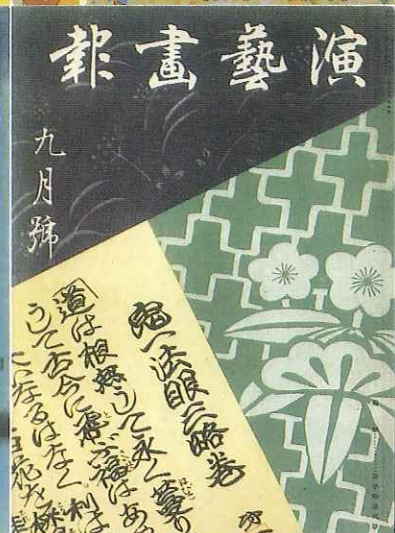
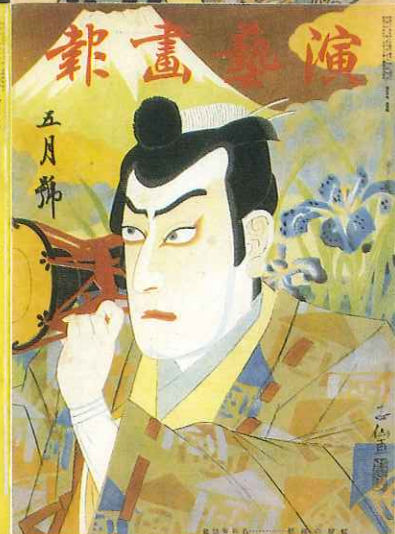
演芸画報

昭和編

不二出版

近代日本演劇史・文化史を体現する総合演芸雑誌の復刻版！
「大正編」刊行完結につづき、「昭和編」全202冊を合本復刻！

全68巻



演劇博物館成る

坪内逍遙



十月廿七日午後一時から演劇博物館の開館式が行われた。工費十八萬圓、様式はエリザベス朝の劇場たるフオ
ーチエン座に則り、入口を舞臺とし、其上には「世界はすべて演劇なり」といふ意味の文字が浮彫されてある。會
場は其入口の前面で、來賓は英國大使サー・ジョン・テネリー氏を始め、劇界の權威者を網羅して非常な盛觀であ
つた。市島謙吉氏の請願の報告に續いて高田早大總長の式辭、上田萬年博士の學界代表の祝辭、英國大使の坪内
博士沙翁研究に關する演説、演劇博物館に關する有益な
に寄與されたのである。

閣下並びに諸君、
此たび諸君の優渥なる御同情、御援助に依
りて、此建物を以て申し盡すことは出来ません。
多年の宿願を現實にすることを得ましたる
易に言を以て申し盡すことは出来ません。
此建物は、只今こそ、まだ甚だ空然た
い一の倉庫、一の物入れに過ぎない。
も、此倉庫、此物入れ場たるに過ぎない。
のために、當に來るべき新文化的要素を養ひ
を移めまする日のあるべきことを、私はひそ

「伽羅先代萩」三方觀



岡政の門衛右歌



助之男の門衛右吉



井の沖の助福



島松の藏時



兼頼の藏時



歌舞伎座十月狂言

「伽羅先代萩」三方觀

岡本 綺堂
中内 蝶二
渥美 清太郎

歌舞伎座の十月一番目には、歌右衛門の政岡、中車の仁木で先代萩が出演した。いづれも當代での先代萩俳優で、
今後これだけの舞臺は滅多に見られないかも知れません。そこで古劇ながら先代萩を三方から觀た考察録を掲げる
事に致しました。先づ岡本綺堂氏から寄せられた、先代萩の義太夫と脚本についてのお説を掲げます。

◇ わたしは「伽羅先代萩」の作について、何か
書くべき役目を受けたせられた。この作の變遷
く語らないことにする。
と云ふのは、實は一つの逃げ口上で、この「伽羅先代萩」とい
芝居は、その生ひ立が實に複雑紛糾をきはめてゐて、とても簡單

復刻の辞

『演芸画報』は、東西の大小劇場の、とくに歌舞伎を中心に、その舞台写真、
劇評、評論、脚本、考証、談話、芸談等を掲載した総合演芸雑誌である。

本誌は、明治四〇年一月に創刊され、以後戦時下の雑誌統合『廃刊にいたるまで』
三七年間、関東大震災による三カ月の休刊を除いて、明治・大正・昭和の三代
にわたって計四四〇冊、毎月確実に刊行されつづけた。

本誌は、歌舞伎を中核としながら、ひろく新派、新劇、邦楽、人形浄瑠璃、落語、講談、活動写真、大道芸まで、当時の
芸術・娯樂のすべての情報を網羅している。舞台上の演技を誌面上に再現しようという「芝居みたま、」など独特の企画、
響庭簗村・伊原青々園・中村吉蔵・小山内薫・岡田八千代・長谷川時雨・久保田米斎・渥美清太郎・川尻清潭など各時代
のほとんどすべての劇評家が毎号誌面を飾った劇評、当時の歌舞伎脚本のほとんどを網羅するおびただしい量の戯曲・人
物・演出研究、俳優・演出などあらゆる分野にわたる数万枚におよぶ口絵写真——こうした本誌の特色をあげてみると、
近代日本演劇史・文化史がみごとに凝縮されていることがわかる。

庶民にささえられ、守られつづけた本誌は、すでに明治期分が復刻されている
が（三一書房・一九七七〜一九七八年）、弊社では、先に、大正期に刊行され
た一六九冊を全八一巻にまとめ、このたび引き続き「昭和編」として二〇二冊
を全六八巻にまとめ、研究者、大学図書館等の要望に応えるものである。

演藝畫報



四月號

◆推薦のことは

貴重な芸能史料の大集成 有光次郎

文化史における芸能史の領域は、じつに大きなものです。そして芸能史は、世相風俗と重ね合わせて語られることが多いようですが、実際は、名優名手の出現が史的節目として輝いて、その発展の様相をわれわれに知らせてくれます。

その意味で、明治から昭和までの、名優名手の名舞台を記録した『演芸画報』の復刻出版は、貴重な芸能史料の大集成の刊行であって、きわめて有意義な文化行為であると思います。

(日本芸術院長・日本舞踊協会会長)

歴史の息吹と世相を伝える生きた資料 倉橋 健

昭和期の『演芸画報』は、戯曲もあれば俳優の興味深い芸談や、一流の批評家作家のすぐれた論議やエッセイものについて、演劇を研究する上の宝庫だ。それに大正どころか、昭和も遠くなった今では、短い囲み記事や広告までもが、歴史の息吹や世相を伝えてくれる生きた貴重な資料である。読み物としてもたのしく、より多くの図書館がそなえてくれることを望む。

(早稲田大学教授・日本演劇学会会長)

新劇史の資料としても 千田是也

『演芸画報』といえば、なんといっても歌舞伎であるが、関東大震災以前すなわち築地小劇場が雑誌『築地小劇場』を刊行するまでは、『演芸画報』は新劇をも扱うほとんど唯一の演劇総合雑誌であった。坪内逍遙、小山内薫を始めとして多くの演劇人たちが寄稿しており、それだけでも演劇史研究にはまず見落とせないばかりか、ぜいたくに綴じ込まれたたくさんの口絵写真のなかに上山草人や水谷八重子らの舞台写真が数多く見られるのも『演芸画報』ならではの楽しみである。また当時一流の劇評家たちによる舞台評も当然気になる存在である。

当時の演劇界の状況を鮮やかに再現するであろう今回の企画に拍手を贈るものである。

(新劇団協議会・俳優座)

『演芸画報』とともに歩んだ半生 北條秀司

『演芸画報』は明治四〇年から昭和一八年まで、三十七年に亘って四四〇冊発行されたという話だ。とすれば、ぼくの生まれた明治三五年から、五、六年してから創刊されたというわけだ。そして、わたしが処女作「表彰式前後」で世に出た昭和一二年から六年目に廃刊されている。だからわたしは『演芸画報』とともに半生を歩んで来たことになる。すなわち、わたしは『演芸画報』によって演劇の眼をひらかれ、『演芸画報』によって啓蒙され、『演芸画報』によって生長させられたということになる。ほんとうに心から感謝しなければならぬ。廃刊は戦局苛烈のためだったが、その頃は演劇協会とも親類づきあいをしていたから、安部豊さん、渥美清太郎さんの先輩と、用紙の苦勞をしながら、貴重な演劇夜話を聴かせてもらった。わたしはいつも芝居の世界にもう一度『演芸画報』や『新演芸』が再刊されることをねがっている。近頃の演劇雑誌には七ムツカシイ演劇論ばかり掲載されて、たのしい評判記がわすれられている。歌舞伎をもっとも庶民に親しませなくちゃいけないという思い、いつも提言している。復刻もありたいが、再刊してくれるともっとありがたい。

(日本演劇協会会長)

未来の舞台芸術の発展のためにも 欠かせない貴重な記録 南 博

今日でこそ、演劇の舞台は映画、ビデオなどで再現され保存されるが、戦前の演芸は、写真による資料が絶大な意味をもっている。

昭和時代が終わりを告げた今日、ふり返ってみると、昭和初年から花ひらいた新聞、雑誌、放送などのマスコミに支えられた演芸の画期的な発展がわれわれの目の前に迫ってくる思いがする。

『演芸画報』は、その歴史的な価値はもとより、現代および未来の舞台芸術の発展に、欠くことのできない反省と示唆を与える貴重な記録として推薦したい。

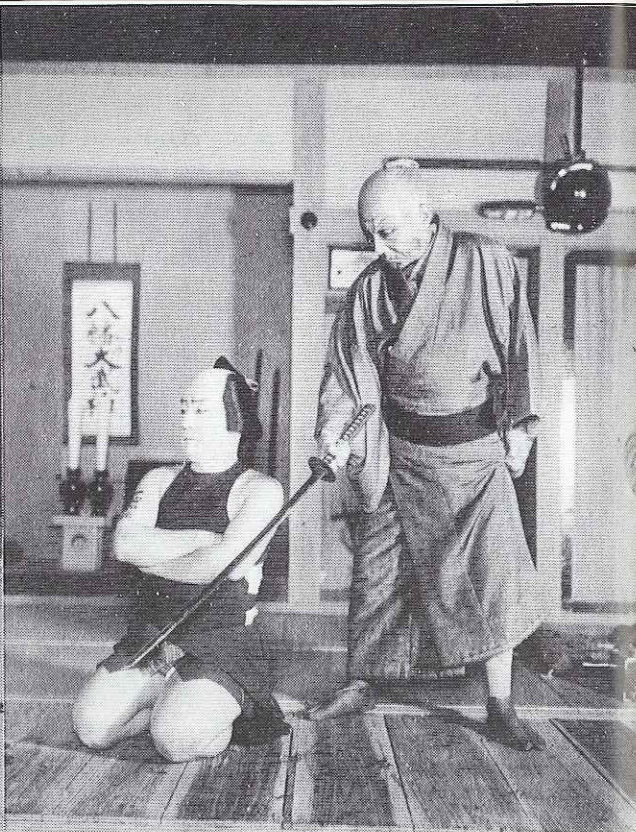
(一橋大学名誉教授・伝統芸術の会会長)





◆『演藝画報 昭和編』
主要登場役者等一覧

伊井 蓉峰	沢田正二郎
市川猿之助	沢村源之助
市川小団次	沢村宗十郎
市川左団次	沢村宗之助
市川 寿海	島田 正吾
市川 松蔭	曾我廼家五郎
市川団十郎	竹本土佐太夫
市川段四郎	辰巳柳太郎
市村羽左衛門	中村歌右衛門
井上 正夫	中村翫右衛門
岩井半四郎	中村鷹治郎
榎本 健一	中村吉右衛門
大辻 司郎	長谷川 一夫
大谷友右衛門	花柳 寿輔
岡田 嘉子	花柳章太郎
尾上菊五郎	坂東三津五郎
尾上 松緑	坂東 養助
尾上 梅幸	藤間勘十郎
片岡仁左衛門	古川 緑波
河合 武雄	松本幸四郎
河原崎国太郎	水谷八重子
河原崎長十郎	水の江滝子
神田 山陽	守田 勘弥
喜多村緑郎	柳家金語楼



◆『演藝画報』関連年表

一九二七年 深川高砂座開場
前衛座演劇研究所創立
(昭和2)
前衛座分裂。前衛劇場とプロレタリア劇場に分かれる
明治座新築落成
プロレタリア劇場・前衛劇場合同、東京左翼劇場結成
松竹家庭劇第一回公演
坪内博士記念演劇博物館開館
「お子様の芝居」歌舞伎座で始まる
常盤座開場
一九二九年 日本プロレタリア劇場同盟(プロット)結成
築地小劇場分裂。劇団築地小劇場と新築地劇団生まれる
新歌舞伎座開場
帝国劇場、松竹の経営になる
一九三〇年 東京劇場新築落成
尾上菊五郎、日本俳優学校を設立
「プロレタリア演劇」創刊
一九三一年 河原崎長十郎・中村翫右衛門、前進座設立
市川猿之助、松竹を脱退し市村座へ
新派の名狂言「二筋道」第一回上演
市川小太夫、新興座設立
一九三二年 「プロット」創刊
肉弾三勇士劇、各地で上演
大阪歌舞伎座新築開場
若手歌舞伎第一回興業
義助新劇場第一回公演「東劇のボーギー」
九世市川団十郎三十年忌追善興業
エノケン、松竹専属となつて松竹座に出る
一九三三年 前進座「勧進帳」上演
日本劇場(日劇)開場
一九三四年 東京宝塚劇場建つ
日本俳優学校劇団第一回公演「靈驗」
東京左翼劇場、中央劇場と改称
「テアトロ」創刊
有楽座開場
一九三七年 新築地劇団、新しい演劇形態「キノドラマ」
マ「嗤ふ手紙」発表
翌年につけ新劇全盛。新協劇団「火山灰地」、新築地劇団「綴方教室」
文学座結成
日中戦争の開始に伴い演劇界も統制を受ける
時局に合わせた脚本の上演。「土と兵隊」「麦と兵隊」
一九三八年 杉本良吉・岡田嘉子、越境してソ連へ
一九四〇年 新協・新築地劇団に解散命令、同時に関係者百余名検挙
一九四一年 「国民演劇」創刊
日本移動演劇連盟結成
一九四三年 「演藝画報」、他の演劇四誌とともに廃刊
一九四五年 移動演劇隊桜隊、広島にて原爆死

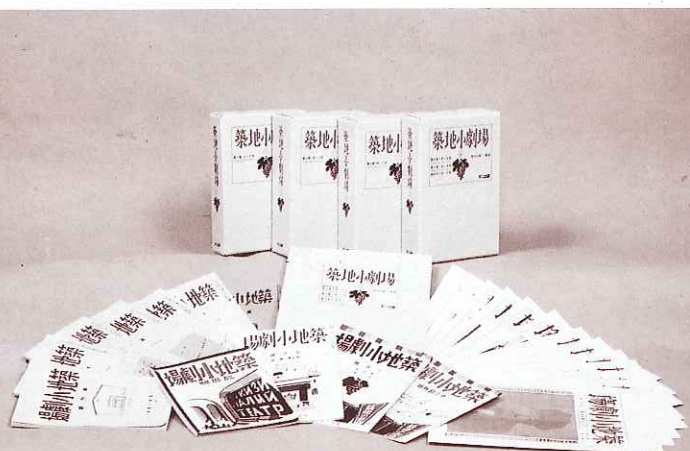
※写真説明(四頁より)

帝国劇場「大菩薩峠」(中里介山原作)
守田勘弥
明治座「彦六大いに笑ふ」(三好十郎作)
左から 山口俊雄・井上正夫・岡田嘉子
歌舞伎座「絵本太功記」
中村吉右衛門
東京劇場「婦系図」(泉鏡花原作、川村花菱脚色)
左から 水谷八重子・梅島昇
有楽座「土と兵隊」(火野葦平原作、高田保脚色)
左から 島田正吾・辰巳柳太郎
有楽座「大地」(パール・バック原作、金子洋文劇化)
左から 水谷八重子・岡譲二
新橋演舞場「寿曾我対面」
市村羽左衛門
帝国劇場「店開き一心太助」
左から 市川猿之助・沢村訥子
歌舞伎座「黎明曙光」(川口松太郎構成)
左から 李香蘭・田中重一郎

築地小劇場

一九二四(大正13)年、小山内薫・土方与志によつて築地小劇場が創設され、新劇運動の幕が開かれた。築地小劇場では、古今東西の名戯曲の上演が試みられ、多くの名優を輩出し、その近代演劇史上に残した意義は大きい。その機関誌『築地小劇場』全冊とポスター・プログラムを可能なかぎり原本に忠実に復刻したものである。

- 大正13年6月・昭和5年2月
- 全63冊・別冊1・付録つき
- A5・菊判ほか・並製・総約4、000頁
- 別冊―解説(祖父江昭二)・総目次・索引
- 付録―ポスター4枚・上演プログラム75枚
- 本体揃価格87、000円
- 付録のみ分売可(本体価格12、000円)



付録=ポスター・プログラム

趣味

本誌は、自然主義文学運動の高揚期に、『早稲田文学』の姉妹誌あるいは坪内逍遙の『文芸協会』の別働隊として、文学を中心に近代的な審美意識を向上させることを目的として発刊された。口絵に俳優や文士らの写真版を載せたり、音楽・演劇・遊芸・絵画等幅広く扱うなど、総合文芸雑誌として貴重な文献全59冊を合本し復刻。

- 明治39年6月・明治43年7月(第一次)
- 明治45年6月・大正3年1月(第二次)
- 全19巻・別冊1
- 菊・B5判・上製・総約13、000頁
- 別冊―解説(尾形国治)・総目次・索引
- 本体揃価格350、000円



父歸るを観て 山本有三

脚本では幕と書いてあり、舞臺では幕が下りたとしても、実際に於いて幕が決して下りてゐない戯曲が澤山ある。作者は幕を下したつもりであるが、實地には結末がついてゐない脚本を書いて得々としてゐる作家が世間には随分あるやうだ。現代の日本にはかういふ作家が別して多いやうだけれど、差障りがあるから例は外國からとすることにしよう。例へばズーデルマンの「マゲダ」である。これは須磨子もやつた物だから大抵の人は知つてゐる戯曲と思ふが、退職陸軍中佐の故郷に歸つて來たので、父子の間に新舊思想の衝突がある。そして争つてゐる間に父親は卒で幕になつてゐるが、成程鳥渡見るとこれで終つても、實は此戯曲は本當にこれで終つたといふこゝに父親が都合よく死んだから、相手が見えるが、それはたゞ外面から見た形式の上だ衝突といふ根本の問題については少しも結末がある。此作では丁度工合よく中佐が死んだからものゝ、若し死ななかつたら此争闘はいつ迄も一度卒倒したとしても、父親がまた息を吹返して澤山ある。なせと言へば、世間は常に高橋君を誤解してゐるからである。併し、まだその時ではないと思ふ。高橋君にはまだ「未來」がある。まだ「餘程面白い「未來」がある。私はさう信じてゐるから、當分はまだ黙つて堪へてゐようと思ふ。高橋君と私の交際は、二人ともまだ自分の職業を自覺

市川左團次の研究

三通の手紙

小山内薫

高橋君については、世間に向つて言ひたい事書きたい事

して「親父が死んだら役者はやめだ」といふやうな事



市川左團次

つてゐた。私は幼年學校の友達になる最初の機会に、高橋君は雅號を「升別號」を「利雅史」といふ

演芸画報 大正編

総合演芸雑誌『演芸画報』の大正期刊行分―全一六九冊を合本し、全八一巻にまとめて復刻！ 残部僅少！！

※復刻版『演芸画報 大正編』概要

体裁―全81巻／B5判／上製・クロス装・函入

総44、100頁

推薦―有光次郎 倉橋 健 千田是也 北條秀司 南博

配本―全15回配本（'87年1月～'90年2月配本完結）

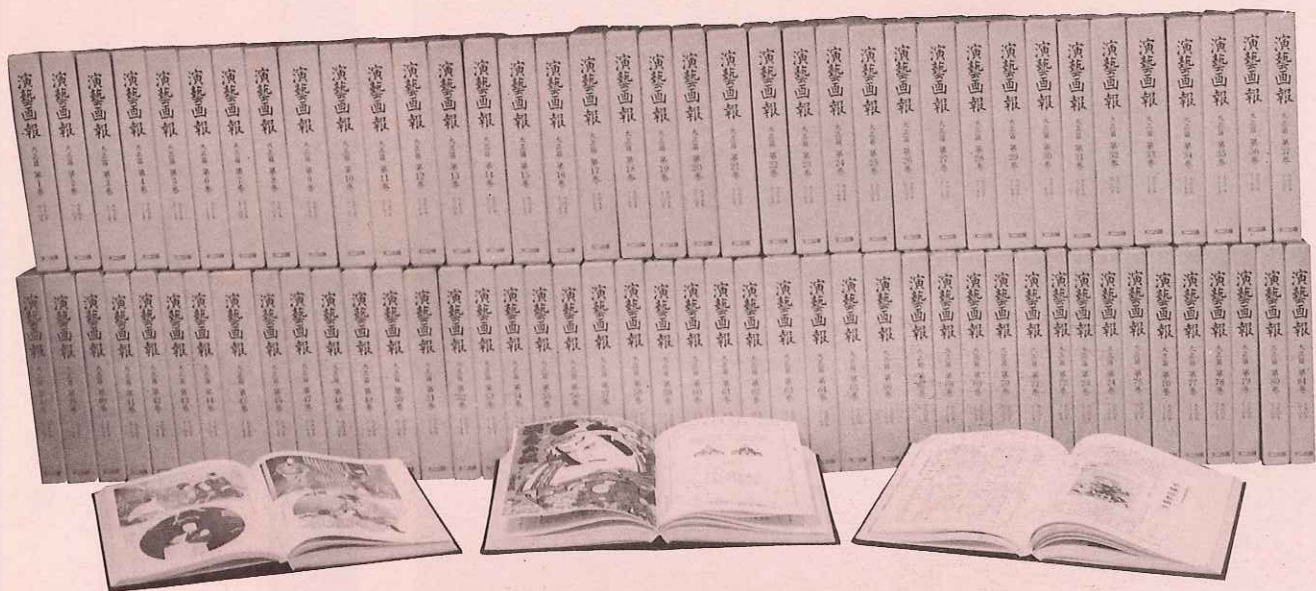
本体揃価格―1、296、000円

※別冊―口絵総目次・索引について

当初、大正期の復刻版刊行と同時に、「別冊」として「口絵総目次・索引」の刊行を予定しておりましたが、作業量が膨大なため、刊行が大幅に遅れております。現在の進行状況を考え、刊行は一九九一年中の予定であります。ご了承下さい。また、別冊の価格も現在のところ未定にて、復刻版ご購入の皆様には、あらためてご案内申し上げます。



※復刻版『演芸画報 大正編』全八一巻



※復刻版『演芸画報 大正編』概要

配本	巻数	刊行年	本体価格	配本年月
第1回	第1、2巻	大正元年	32、000円	'87年1月
第2回	第3、8巻	大正2年	96、000円	'87年4月
第3回	第9、14巻	大正3年	96、000円	'87年7月
第4回	第15、20巻	大正4年	96、000円	'87年10月
第5回	第21、26巻	大正5年	96、000円	'88年1月
第6回	第27、32巻	大正6年	96、000円	'88年4月
第7回	第33、38巻	大正7年	96、000円	'88年7月
第8回	第39、44巻	大正8年	96、000円	'88年10月
第9回	第45、50巻	大正9年	96、000円	'89年1月
第10回	第51、56巻	大正10年	96、000円	'89年4月
第11回	第57、62巻	大正11年	96、000円	'89年6月
第12回	第63、66巻	大正12年	64、000円	'89年8月
第13回	第67、70巻	大正13年	64、000円	'89年10月
第14回	第71、75巻	大正14年	80、000円	'89年12月
第15回	第76、81巻	大正15年	96、000円	'90年2月

復刻版『演芸画報 昭和編』概要

体裁 全68巻／B5判／上製・クロス装・函入／総30、038頁

推薦 有光次郎 倉橋健 千田是也 北條秀司 南博

（五十音順）

配本 全16回配本

（90年4月～94年1月）

本体揃価格 1、088、000円

配本概要

配本	巻数	刊行年月	本体価格	配本年月
1	第1～5巻	1927（昭和2）年1～12月	80、000円	1990年4月
2	第6～10巻	1928（昭和3）年1～12月	80、000円	1990年7月
3	第11～15巻	1929（昭和4）年1～12月	80、000円	1990年10月
4	第16～19巻	1930（昭和5）年1～12月	64、000円	1991年1月
5	第20～23巻	1931（昭和6）年1～12月	64、000円	1991年4月
6	第24～27巻	1932（昭和7）年1～12月	64、000円	1991年7月
7	第28～31巻	1933（昭和8）年1～12月	64、000円	1991年10月
8	第32～35巻	1934（昭和9）年1～12月	64、000円	1992年1月
9	第36～39巻	1935（昭和10）年1～12月	64、000円	1992年4月
10	第40～43巻	1936（昭和11）年1～12月	64、000円	1992年7月
11	第44～47巻	1937（昭和12）年1～12月	64、000円	1992年10月
12	第48～51巻	1938（昭和13）年1～12月	64、000円	1993年1月
13	第52～55巻	1939（昭和14）年1～12月	64、000円	1993年4月
14	第56～59巻	1940（昭和15）年1～12月	64、000円	1993年7月
15	第60～63巻	1941（昭和16）年1～12月	64、000円	1993年10月
16	第64～68巻	1942（昭和17）年1～12月 1943（昭和18）年1～10月	80、000円	1994年1月

●本カタログ中の表示価格は、
全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。
●お近くの書店にご注文ください。

不二出版

東京都文京区向丘一―二―一二
TEL 〇三（八二二）四四三三
FAX 〇三（八二二）四四六四
振替 〇東京六―九四〇八四